

大會印象記

村長利根朗

もう雪にうずもれているかもしない。村研の会場から、合掌の大屋根を背に紅葉が夕日に映えて目にした。かつて秘境と呼ばれた飛騨白川郷は、今も都から遠く、ここに会場を設けた柿崎さんのご苦労に感謝する。しかも、「どぶろく祭」に会期を重ねて、神のどぶろくを頂戴したあの総会では、創立時の村研の姿勢をあらめて確かめ得た。「この会（村研）には、めんどうな規約は作るまい。…肩書を問題にしまい。…この会には閉会の辞がございません。会長がございません。これはまさに有賀喜左衛門式の会であって、また現在もそうであります」と。有賀先生への別れを告げる日の我が師中村吉治の声が耳によみがえる。

村研大会は和氣あいあいと終わつたが、日本の農村をとりまく環境の甚だ厳しいことを今回の大会でも痛感した。現代を対象とする自由論題・課題研究のすべてに、日本農村の転換期を見た。一昔前の村研なら、しばしば聞かれた「共同体」という言葉は、この大会では一度も耳にしなかった、と思う。日本農村のここ三十年の歴史を反映している。同じ地域に住んで、同じ農業を営んでいても、それだけで連帯を感じるという時代ではなくつてはいるようだ。地名としてという意味だけの村の中で、有機農法と汚染農法と、「反減反派」と「減反派」と対立していたりで、農業を生業とする家という企業体が形成する形だけの市民社会の如くである。最近読んだ

新聞に大潟村の「頑守派」の人の言葉として「農業に企業理論は通用しない」とあった。今度の村研でも、「二世代專業が可能なら聚落も家も維持しうる」、「経済単位としての農家は衰退しつつある。聚落がこれを救いうる」と言う発言があった。家と聚落の呪縛を感じず。しかし、もはや、そういう時代ではないのかもしれない。私の内心はそれを悲しんでいるのだが、商品の論理はもっと厳しいようだ。没落するものを没落するに任せておいてはなるまいというのは大切だが、村がその救い主となれる時代でも、もはやないらしい。「個別経営の確立・企業体としての自由その集団としてのサヴァイヴァル」、「旧来の部落の理論だけでは解けない問題にどう対処していくか」という発言もあった。それが日本農業の生き残る道であるとしたら、もはや村はいらない。村研の発想もそういう方向に向かいつつあるのだろうか。

